

研究論文

現代ツーリストの概念規定をめぐる諸論調

—現代ツーリストの特性はどのようなものか—

Conceptual studies on tourist today from the paradigmatic point of view

大橋 昭一

Shoichi Ohashi

和歌山大学客員教授、名誉教授

キーワード：ツーリスト、ポストツーリスト、ツーリズム動機

Key Words：tourist, post-tourist, tourist-motivation

Abstract：

There have been so many conceptualizations of tourist today that no unified theoretical definition is found. This paper surveys such characteristic conceptualizations that are represented by the concept of post-tourist, arguing the post-tourist denote not only the tourist in post-modern, but also them in transmodern, the next stage to the post-modern.

I. まえがき—本稿の課題

ツーリズム理論では、近年、これまでの理論内容を発展的に変革する主張が叫ばれている。その代表的書物の1つに、インドの著名なツーリズム論者、シン（Tej Vir Singh）の呼びかけ・編集で2015年に刊行された著『ツーリズム研究における諸課題』（文献S2）がある。この編著で注目されるべき特徴点は、次のような執筆過程がとられ、編著の構成になっていることである。

まず、現在ツーリズム研究の基本的問題のいくつかについて、編者シンが簡単な問題提起をする。これに基づいてそれぞれのテーマについて世界的に最適と思われる論者が基調論文の論考を執筆する。それを2～3人程度の論者に送り、それぞれに論考を書いてもらい、それをテーマごとに執筆者同士で回覧し、確定して仕上げる。これを編集してシン編著は出来上がっている。それに最終的に収録されている論考をみると、このような執筆、編集過程が滲み出るものとなっているばかりか、各執筆者の論考では、当然ながら、当該テーマに関する多くの文献が引用・参照されている。

つまり、このシン編著には、当該テーマについて現在世界の最先端の所論が論争的に提示されており、当該テーマについて世界的論究状況を知るのに実に有用なものとなっている。本稿は、同編著収録論文のうちでも、現代ツーリストはどのようにとらえられるべきかという問題意識のもとに、関連する論考を取り上げ、それを手がかりにこの問題に関する現代ツーリス

ム論の基本的動向を管見するものである。

この点について、編者シンは、同編著冒頭の序言において、次のように述べている。すなわち、ツーリズムは、近年世界的に大躍進を遂げているが、基本的にはこのことに基づいて、かつ、ツーリズム論以外の学問領域においてツーリズム研究が盛んになっていることもあって、ツーリズムに関するこれまでの用語や規定で意味が変化しているものや、新しく出現したり、逆に消滅したりしているものもある。そのためツーリズム関連用語等では「奇妙なパラドックス的な現象（a strange paradox）が起きており、少なくとも整理が必要になっている」（S3,p.1；以下引用文におけるカッコ内は、他に断りがない限り、本稿筆者のもの）。

こうした問題の1つとして「ツーリストの概念規定」があるととして、まず、これを取り上げている。このうちの「ツーリストの規定・定義」は、世界的に妥当するものとして、周知のように、世界観光機関（UNWTO）で定めているものがある。これをみると（ただしここではシンの記述に基づき、現規定の出発点になった1993年の規定が対象。S3,p.3）、まず旅行者は「ビジター（visitor）」と表記され、（大要でみると）「ビジターとは、レジャー、ビジネス、その他の目的のため、通常的な定住場所を離れて、引き続き24時間以上、ただし1年を超えないで、旅行し滞在するものをいう。ただし現地での報酬を得るものは除く」と規定されている。

これは、ツーリスト数の世界的な統計把握の必要性からも、多くの国でツーリスト統計上の凡例的規定になっているものであるが（日本の場合は「観光入込込み客統計に関する共通基準」（2013

年3月改訂))、これで見ると、まず端的には、それは正確には“ビジター”の規定になっていて、“ツーリスト”の規定にはなっていない点が注目されざるを得ない。

これは確かに、統計上、本来の“tourists”と“same-day visitors”とを区別して示すという事情があったためであるが(L2, p.28)、この点の問題点は、直近では例えばガーネム(Ghanem, J.)の2017年の論文(文献G)で取り上げられている。ガーネムのいうように(G, p.14)、かつ本稿筆者の考え(例えば文献Ω 1, p.3)としても、これはあくまでも統計用の「定義」であって、日常用語上あるいは研究上などでは、これとは別のツーリスト(観光客)の「概念」規定が必要なものである。

しかしこのようにツーリストについて「統計用の定義」と「一般使用上の概念」とを区別するという考え方は、理論的にはあくまでも1つの考え方であって、これを良しとはしないもの、すなわちこうしたいわゆる「統計用の定義」にも、それに照応したツーリズム(観光)のとらえ方が前提となっており、両者を区別することはできないという考え方が、当然ありうる。

2015年シン編著は、こうした見解も斟酌し、まず冒頭において、この問題を広くとらえ、現在ツーリストの本質的特性を解明しようとするのである。このためシンは、この点についてタイトル的には以下のような3点に論点を絞って提示している。

- ①「私はトラベラー、あなたはビジター、かれらはツーリスト。では、ポストツーリスト(post-tourist)とは誰をいうのか」。
- ②「(現在における)ツーリストの性格はどのようなものか。それは『在俗的巡礼者(secular pilgrim)』か、『ヘドニズム的快楽追求者(hedonistic search of pleasure)』か」。
- ③「ツーリストが旅行する目的は何か。それは『自己(self)の発見か』あるいは『他者(the other)の探究か』」。

本稿では、このうち、上記で述べた本稿課題に基づき、①と③を対象とする。まず①を取り上げる。ここでの要点は次のところにある。すなわち現在、ツーリストは、端的にはポストモダン時代に照応したポストツーリストといわれることが多いが、それは、妥当性があるのか、ということである。その基調論文は、シン編著冒頭の第1章第1節になっている。執筆者は、イギリス・ノッティンガム大学のマッケイブ(Scott McCabe)で、その論文タイトルは「現在ではわれわれ全員が『ポストツーリスト』であるのか。ツーリスト・カテゴリー、アイデンティティおよび(ツーリズムにおける)ポストモダニティとはどのようなものか」(文献M2)である。

なお、参照文献は末尾に一括して記載し、典拠箇所は文献記号により本文中で示した。

Ⅱ. ポストツーリストという概念の有効性をめぐって

1. マッケイブの「ポストツーリスト」論

マッケイブは、その論文の冒頭で、事柄をどのような名称(name)でよぶかは重要なことであるとわざわざ断っている。というのは、名称が異なることは、そのものの意味(meaning)が

異なることであるとし、そのうえで、ツーリストについて近年の動向をみると、今日ではこれをポストツーリストとよぶのが相当であると、提議している(M2, p.18)。

この場合マッケイブが前提としているのは、今日の社会は、とにかくポストモダン時代といっているという認識であるが、ただしそれは、概ね1980年代において本来的なものになったという位置づけのものである。しかしポストモダンとしての特性の現われ方は、時代により人により異なる。ツーリズムについてみると、今日のそれに対し変革をもたらししているものは、確かにモダニティの変化に根源があるが、しかしその場合変化の意味は時代により領域により必ずしも一様なものではない、というのである。

従ってマッケイブは、今日でも、それを完全に見分けることは容易ではない、という。すなわちマッケイブによると、現時点でも現実には、すべてが完全にポストモダンとしてはとらえられないものである(M2, p.19)。これが、この問題についてのマッケイブの出発点たる認識である。そこで例えば、今日のツーリズムでは、例えばサステイナブル・ツーリズムの要請も考えて、スロー・ツーリズム(slow tourism)を推進すべきであるという主張がみられるが(L2, p.122)、マッケイブは、現在の動向としては、そのようなものは正鵠を射たものではないと否定している。

そこでマッケイブは、ポストモダンあるいはポストモダニティといわれるものが、本質的にどのような特徴のものと理解すべきかを提示しておくことが必要とし、少なくともツーリズムのあり方としては、それは本来次の点にあるとする。すなわち、ポストモダンの根本は要するに「差異の消滅」にあるから、ツーリズムでも人々の間における差異の消滅、端的には人々が他の人々を見知らぬものとは考えないようになるところ(de-exoticizing, de-mythologizing)にあり、それは技術の進歩、とりわけコミュニケーション技術の進歩により人々の間におけるコミュニケーションのあり様が進化することにより可能になる。そしてこれにより「われわれはわれわれ自身をよく知ることができるようになること」ができるとする。ただしこうしたポストモダンの特色が一般的にみられるようになったのは、時期的にはマッケイブによると、1980年代においてである。

すなわち1980年代は、衆目のみるところ、ポストモダンの傾向がさしあたり最初に一般的にかなり広まり、社会の耳目を集めた時期である。ちなみに、ポストモダン論の代表的提唱者の一人、リオタール(Lyotard, J.)が「ポストモダンとは、これまでの大きな物語の終焉の時代」という有名な特徴づけを行ったのは1979年のことであった(文献L3)。

マッケイブは、この時期を境にして「ツーリスト、トラベラー、ビジターという範疇の間においても注目すべき変化が起きている。これには、旅行の時間や距離などの量的側面と、旅行方法や旅行情報などの質的側面とがあるが、この両側面において、今日のようなIT技術や交通技術に依存したツーリズム時代が一応実現した。これはポストモダ的なツーリズムといっ

ていい時代である。故にツーリストは、ポストツーリストと特徴づけられるものとなった」と提議している (M2,p.19)。

このうえにたつてツーリズム理論の研究状況をみると、まず、こうしたツーリズムの変化、すなわちポストモダン化を背景にツーリズム研究にも新しい方向が生まれたことが指摘できるとする。それには、例えばアーリー (Urry, J.) を中心にしたモビリティの研究 (文献 U3) などが挙げられることがあるが、しかしマッケイブのみとすると、こうしたアーリーらの研究は、例えば (このマッケイブ論者が対象とする) ツーリストの類型化などでは大きな進展をもたらしたものではなかった。それどころかアーリーらは、ツーリズム論本来の研究課題であるツーリズム関連的行動と、そうでない行動との違いを不明確にしたものであった、と論じている (M2,p.20)。

そこでマッケイブは、いわゆるツーリズム研究の基本的立脚点となる問題に目を向ける必要があるとして、次のように書いている。「このことは、いうまでもなく簡単なことではない。というのは、こうした論議の土台には原理的に大別して『トラベラーに立脚した理論方向 (traveller construct)』と『ツーリストに立脚した理論方向 (tourist construct)』との2種類があり、もともと前者の方がよりポジティブで、道義的により優れたアイデンティティを持つ概念 (a more positive and morally superior identity concept) とみられてきた。これに対し後者の『ツーリストに立脚した理論方向』は圧倒的に蔑視対象的なもの (overwhelmingly pejorative) とされてきたためである。例えば研究者でも、その研究分野を尋ねられた場合、ツーリストの研究というよりは、ビジターあるいはトラベラーと答えることを好む者が多かった」 (M2,p.20)。

マッケイブによると、これには確かに、当時ツーリストといわれた人たちの様子や言動などにより助長された面がある。というのは、当時ツーリストといわれたのは、一般的にはいわゆるパッケージツアーの人たちが多く、そうした人たちの一律的な団体的言動は一般にひんしゅくをかう場合が多く、こうしたツーリストは、他のトラベラーやビジターとは、言葉のうえでも別扱いという場合が結構あったからである。

そこでこの問題を回顧的にみると、こうしたパッケージツアーの人たちを中心にしたいわゆるツーリストの言動が、社会的一般的に特段に奇異なものと感じられなくなったのは、マッケイブによると、1980年代以降、すなわち広くポストモダン時代の到来といわれるようになった時期においてであって、この時期以降においてツーリストという言葉は、トラベラーやビジターと並んで市民権を得た。

それは“ポストツーリスト”という言葉においてであり、“ポストツーリスト”という用語には、“ツーリスト”という言葉、“トラベラー”などと区別されないものにする意義があった、というのである。この点についてマッケイブは改めて、今日のツーリストは性格的にポストツーリストとして特徴づけられるのが正解とし、その根拠には次の3点があるとしている (M2,pp.20-21)。

第1に、現在のツーリストは、例えばパッケージツアー参加者と一般の個別的ツーリスト (いわゆるトラベラー) との間において、言動等において特段に区別がないものとなっていることである。パッケージツアー参加者でも自由行動領域が拡大しているし、何よりもテレビなどによる画像的通信手段に依存する割合が、両者において共通し、大になっている。

第2に、ツーリズムの主たる訪問対象となる地域において、特別にツーリスト用という所と、そうでない一般的な所の間で、差異が小となり、街並み全体がミックス的なものとなっていることである。少なくとも訪問客としてツーリズムしたいとする所は、いまやパッケージツアー参加者かどうかにより変わるところは、ほとんどない。

第3に、こうしたミックス化の結果として、あるいはその前提として、ごく一般的にいえば、人々の日常生活においても、ツーリズム生活とのミックス化が進んでいることである。これこそは一般にポストモダンの特徴といわれるものであるが、マッケイブによると、まさに1980年代以降においてこうした時代が到来した、というのである。

ただしマッケイブによると、現在のツーリズムには次のような問題点があり、その克服が当面の課題である。しかもそれらは、ポストモダン化によって自動的に補正されるとは限らないものである。つまり、ツーリズムにおけるポストモダンの把握には、下記のような問題点があるというのである (M2,pp.24-25)。ここには、ポストモダンのいわば規範の本質についてのマッケイブの考え方がみられる。

第1に、現在社会ではツーリズムにおいても、容易にツーリズムに行ける人と、それが困難な人との分化があることである。この状態をマッケイブは、今日社会における“二極分裂化 (austerity)”とよび、“排外主義的な力の作用 (exclusionary forces)”と表現されるものであるとして、こうした状態は、現在でも例えばアジア、南米大陸、アフリカ大陸で強くみられるものであって、現在社会では、それを克服したり、その力を弱化することが喫緊の課題になっているとする。しかるに、ツーリズム研究上でこうしたバランスある考え方 (a more balanced focus) をとるものは、ポストツーリスト論者でも多くないと論じている。

第2に、ツーリズムの直接的動機となるものは、大別すると、ヘドニズム的な本能的な欲求と理性的な真正性を求めるものがあるとされていることにかかわるものである。この点についてマッケイブは、そのいずれが強く現れるかは、その時々事情やそれぞれの人の年齢を含む日常生活的な背景・基盤により変わるものであるから、この点からいえばツーリズムでも、“役割理論 (role theory)”の考えにたつことが最適と考えられるが、ただし適宜な補完などを必要とする、と提議している。

第3に、全体的にみれば現在のツーリズムは、本質上、空間的場所的な分離を助長する傾向を内蔵するといわれていることにかかわるものである。マッケイブはこれを、ツーリズムにおける「物理的および心理的なディメンジョン (physical and

psychological dimensions) の分離」傾向とよんでいるが、現在では都市住民のツーリストが多いことを考えると、その克服のための1つの方策として、例えば都市ツーリズムの改革を考えることが有用としている。

以上のうえにたってマッケイブは、結語において、ポストツーリスト概念の有用性を重ねて強調している (M2,p.26)。それによると、今日のツーリズムでは、指導原理として、もともと (トラベラーなどではなくて) ツーリストの概念が有効であったが、なかでも「ポストツーリストというとらえ方 (post-tourist construct) は、説明上かつ理論上完全に有用な概念 (a perfect useful explanatory and hence theoretical category) である。・・・なかならず役割理論的なとらえ方では有用性が高い」とする。なぜならば、ポストツーリストというとらえ方にはツーリストをある集団の一員としてとらえ、その一員としての経験が、社会の一員というアイデンティティと役割を認識させるうえにおいて有用であり、有効であるからである、と主張している。

次に、シン編著においてマッケイブ論文の次に収録されている、デュン (David Dunn) の論文を取り上げる。デュンはエジンバラ・マーガレット大学所属で、舞台・テレビ関係の問題を専門としているものである。デュンの論文タイトルは、「こうした人々が一種の解決であった。ポストツーリストとグランドナラティブ (grand narratives)」 (文献 D3) というものである。

2. デュンの「ポストツーリスト一般化は時期尚早」の主張

デュンは、マッケイブの以上のような基調論文的所論に対し、まず、このようにあらゆるタイプのツーリストを今日においてポストツーリストとして一括し、同一のように扱うのは (the catch-all construct of the post-tourist)、非現実的で賛同できないとする。というのは、デュンのみるところ、“ポストツーリスト”と“ポストモダン時代のツーリスト”とは、本来、別概念として提起されているものであって、直ちに同義というものではないからである。デュンによれば、何よりもまず、このことが明確に理解されておくべきである。これが、デュンの出発点たる根本的認識である。

このように“ポストモダン時代のツーリスト”とは別に“ポストツーリスト”があるということになれば、それはどのような意味のものかが問われることになる。ところがデュンによれば、“ポストツーリスト”という用語は、一般的あるいは常識的に意味が確定しているものではない。従ってその意味が問われるような場合には、「大学図書館で文献に当たらないと答えられない」という状況にあるというのである (D3,p.28)。

一方、テレビなどの領域からすると、要するに、事実とバーチャルとの収斂の動きがますます強まっているが、しかし現実の動きをみるとポストツーリストというとらえ方には全般的には不適当なところがある。そこで、このテーマ (シン編著における上記3テーマ①) では、さしあたり次の3点が論点になるという (D3,p.27)。

第1に、ツーリズム研究は、根本的視点が“トラベラー”か

ら“ツーリスト”に移り、さらに (多くの論者の見解では) “ポストツーリスト”に移っているといわれ、それが通常的なツーリズムの“グランドナラティブ”とされている。しかしこれによると、一方では大幅な還元 (reductive) があるとともに、他方では重複があり、実際には多くが根底において“反ツーリズム (anti-tourism)”や“ツーリスト迷惑視”に繋がるといってもいいものになる。

第2に、ツーリズムについて旧来のグランドナラティブにとらわれず、例えばポストモダンなど新しい考え方があることが認められる場合には、ツーリズムの需要・供給に基礎をおくライフサイクル論やモビリティ論などでは、“より対応性の高いモデル (more appropriate models)”が必要とされるのではないかと、という問題がある。

第3に、このことはツーリスト経験について一定の民族学理論 (definitive ethnography) は樹立されてこなかったことを示すものといわざるを得ないが、そのなかにおいてもメディア代表的方法 (media representations) に立脚した研究は進んでおり、それによって「日常生活とツーリズム生活との区別消滅 (de-differentiation)」という方向における研究も進んでいるが、この2つの生活は完全に合一しているとはいえないのではないかと。

ここには、テレビなど視覚的メディア側からみた現在ツーリズムについての現状把握が示されていると考えられるが、このうえにたってデュンは、いわゆるグランドナラティブ的事項の現状について、以下のように論じている (D3,p.27)。

まず、ここで問題である、トラベラーとツーリストという用語についてみると、デュンのみるところ、両者の区別が今日ではなくなっているとはいえない。これはひとつには、用語というものは、種々な関係者が種々な状況において自由に使用しているためである。ここで注目されることは、デュンがその一例として次のように述べていることである。すなわちデュンは、ツーリズムはマスツーリズムに関連して使われることが多いが、これは別にしても、トラベラーはハイソサエティの人々の旅行について用いられることがある。これに対しツーリストは“プロレタリア (proletarian)”的な人について用いられる場合があると書いている (D3,p.27)。

これは、本稿筆者のみるところ、ツーリズム関係諸機関・諸施設に今でも顕著に見られる、一種の階級制を反映したものであることができるが、デュンは、これがポストモダンにおけるツーリスト概念にも影を落としており、「ポストツーリストの定式化における明白なパラドックスの根源である」と評している (D3,p.28)。これは、ポストモダン論者の考え方によれば、“ポストモダン転回 (the postmodern turn)”によって、旧来的な差異の消滅傾向が作用し、例えば階層間における質的差異は消える (one size fits all types) はずであるが、ところがこうしたいわゆる還元主義は、実際には、充分には浸透してはいないことを示すものである。

それ故、デュンのみるところ、少なくとも今日では、ポストツーリズムへの転化が起きているかについて、疑問が持たれる事

態にあると総括されざるをえないものである。デュンはこの点について、それよりもまず、「ポストツーリストとは何か (what)」が論究されるべき問題であるという。すなわちかれは、“ポストツーリスト”という用語には意味上で不明確な点があるとして、この問題は依然としてグランドナラティブ上の問題として論じられることが必要というのである。

要するに、この問題についてデュンが言わんとするところは、今日のツーリズムは、一般社会的には、基本的に依然として“トラベラー対ツーリスト (traveller-tourist binary)”という二重性の世の中にあり、“ポストツーリスト”は学界の一部で論議されているだけのものというところにある。

しかしデュンは、多くの発展先進国の場合マスツーリストといわれる人たちは、多くが“新中間層”といわれる人たちであるから、これらの人たちを“ポストツーリスト”とよぶのは意味あることであるとしている。これによりこうした人たちのツーリズムは“ポストツーリズム”とよばれることになるが、それは望ましいことであるとする一方、しかし“ポストツーリズム”という言葉自体は特段に新しいものではないと書き、結語としている (D3,p.33)。

つまりデュンは、現在主流のツーリストには、確かにこれまでにない新しいものがあるが、しかしそれを一括して今日において“ポストツーリスト” (という新しいとはいえない、かつ意味が不確定な) 用語でよぶのは、当を得たものではない、というのである。

次にシン編著で収録されているのは、ポストモダン・ツーリズム論の論客として名高い、イスラエル・ネゲブ大学のウリーリ (Natan Uriely) の論考である。その論文タイトルは「ポストツーリストの研究: 今後における研究のガイドライン」(文献 U1) である。

3. ウリーリによる「ポストモダン概念の修正」の提起

ウリーリは、その論文冒頭において、編者シンの呼びかけ文に対し、その内容がすでに適切性に欠けていると批判している (U1,p.33)。これは直接的には、そのタイトルにおいて“トラベラー”、“ビジター”、“ツーリスト”が挙げられているのみで、肝心の“ポストツーリスト”という言葉は実質上無視されているためである。ウリーリによれば、こうしたことは、もともとこの編著では、“ポストツーリスト”というものが軽視されていることの現われであるというのである。

もっともこの点は、ウリーリのみどころでも、ツーリズム研究全体をみると、もともと非整合的なところがあった。例えば1970年代以降において生じたポストモダン論やポストツーリスト論は、旧来的ツーリズム研究を一新するという意味があるものであったことなどは、十分に評価されることがないものであった、と評している。

ただしウリーリは、この点は、ポストツーリスト論の主張点が、実際面では十分に有効でなかったという事情もあり、こうした点が十分に斟酌されなくてはならないと主張している。すなわちこのことは、換言すると、ポストツーリスト論は十分な現実的妥当性を示すことができず、理論と実際との間においてギャップ

があったことを意味するものであり、このギャップを埋めることが当面の課題であるとウリーリはいうのである。ウリーリのこの論考における根本的主張点は、ここにある (U1,pp.34-35)。

ちなみに、本稿筆者のみどころでも、ポストツーリスト論あるいはポストモダンのツーリズム論というものは、ポストモダンという言葉が人口に膾炙している割には、それほど広く知られ、一般化しているものではない。ウリーリのいうように、ギャップがある。ツーリズム論におけるこのギャップを埋めるためには、ウリーリは、次のことが必要と提議している。

それは何よりも、(ポストツーリスト概念の基礎になっているポストモダンの概念そのものが、現実には不適合なものとなっていると理解されるから) ポストモダンそのものの概念について再検討を行い、新しい概念を提起する必要があるとするところにある。この新しい概念はどのようなものかについて、ウリーリは、(ポストモダン概念の象徴というべきこれまでの根本的命題である)「差異の消滅 (de-differentiation)」は止めて、これを「再差異化 (re-differentiation)」に置き換えることであると主張している。これまでの「ポストモダン=差異の消滅」の命題は、現実的妥当性がないというのである。

この点についてウリーリは、次のように論じている。すなわちポストモダン論は、周知のように、リオタールのいうところの『大きな物語の終焉』で内包されている二者対抗主義的な考え方、例えば男女別、ホストとゲスト、家庭内生活と家庭外生活、日常生活とツーリズム生活という二重性 (dichotomies) 思考からの脱却傾向を提唱するものであった。これに対し「私(ウリーリ)は、ここにおいて、学問研究の焦点を『差異の消滅』から『再差異化』におくよう修正することを呼びかけるものである」という (U1,p.35)。

これはいうまでもなく、ポストモダン論とは何かについての旧来規定の放棄であり、根本的変化・修正が必要というものであるが、ウリーリは、少なくとも今後のツーリズム研究は「差異の存続 (remaining difference)」や新しい差異の生成に焦点をおくものであるが故に、(なんらかの根本原理から演繹的に出発するのではなく) あくまでもツーリズムの実際の経験のうえにたって、いわゆるボトムアップ的に帰納的に理論構築をしてゆくものであり、一般に「土台立脚の理論 (grounded theory)」といわれるものに志向する、と規定されるべきものとしている (U1,p.35)。

その際注目されることは、ウリーリが、その提唱する「概念の再構築 (reconstruction)」の観点から、世界観光機関 (UNWTO) のツーリスト (直接的にはビジター) の統計用定義について1つの改革案を提議していることである。すなわちウリーリによると、「UNWTO 統計でビジターとして計上されるもの」には、大別すると「ツーリスティック目的追求のもの (touristic pursuits)」と、それ以外の理由で移動したりトラベルをするもの (other reason for movement or travel)」とがある。後者はさしあたり総称的に「ハイブリッドなトラベルのもの (hybrid travel)」とよぶのが相当というのである (U1,p.35)。

後者をハイブリッドとよぶのは、そのなかには旅行目的がビジネス上のものや、個人的所用のものなど多様なものを含むが、しかしこれらのものもなんらかのトラベル的行為をするものとして区別がないからである。もっともここには、前者のレジャー目的追求的なものはトラベラーとはいえない。ツーリストというべきものである。これに対し後者は、ツーリストというよりはトラベラーというべきものであるというニュアンスが滲み出ている。ただしここには、ウリーリイのいう再差異化の1つの具体例をみることができる。

他方、ウリーリイは、少なくとも今日では、これらの旅行者すべてについて、なんらかの程度において“ポストツーリスト”として共通視できるものがあると主張する。というのは、今日では、ツーリズム用手段が物的技術上でもサービス提供技術上でも進歩し、ビジネス用のものなどでも、旅行は苦難のものではなく、なんらかの楽しみがあるものとなっているからである。

ただしこの場合、ツーリスト目的のものと、他の、例えばビジネス目的のものとは、旅行もしくは滞在の必要度や緊張度において、つまり旅行もしくは滞在のあり方において同じものとは言えないところがあるから、統計上の定義では別にするのが相当というのが、ウリーリイの提議である。今日の旅行者は、ウリーリイの規定によれば、すべてが性格上ポストツーリストとされるものであるが、統計上は上記のように2者に区別すること（差異化）が有用というのである。

ポストツーリスト概念の妥当性の問題は以上とする。次に、ツーリズム経験の影響にかかわる問題で、ウリーリイがその1つの重要事項として挙げているものに、ツーリズム後におけるツーリズム経験の作用の問題がある。この問題を本格的に論じたのは、ウリーリイ自ら認めているように、ウリーリイが最初といわれる（U1,p.36）。これは、要するに、ツーリズム経験したことが、その後（帰宅後）の生活や活動にどのような影響を与えるかという問題であり、規範論的にはツーリズム経験は帰宅後の活動においてそれ相当な好ましい意味ある影響を生むことが肝要ということを主張するものである。

この点についてウリーリイは、単なる「ツーリスト経験（the tourist experience）をすること」という考えから「ツーリズムにおける経験（experiences in tourism）を活かすこと」をモットーにするよう転換することが必要と提起している。ここでいう「ツーリズムにおける経験を活かすこと」とは、ツーリズムにおいても単にツーリズム目的物などを鑑賞したという経験だけではなく、接触した地元住民や非ビジネス的なツーリズム業務関係者などとの交流の経験などを活かすことをいう。これらの人々をウリーリイは総称的に“非商業的ホスト関係者（non-commercial hosting）”とよんでいる（U1,p.37）。そうした人々との交流経験が、ツーリズム後の生活で活かされることが肝心というのである。これは、外国訪日客が著増している今日の日本などでは大いに論じられてもいいものである。

最後にウリーリイは、次の諸点を力説し、結論としている。

第1に、ここでいうポストツーリストはあくまでも理論的特徴をいうものであって、市場セグメントなどをいうものではない。第2に、理論的特徴としてのポストツーリストというものが機能しうするためには、ポストツーリズムは再差異化を基本理念にすると解される必要がある。第3に、ツーリズムは人的および物的な多様な要素から成り立っているものであるから、ツーリズムの基礎理論としては、例えばラトゥール（Latour,B.）らのアクター・ネットワーク理論が有用である。アクター・ネットワーク理論は、約言すれば、物事は人的アクターすなわち人的要素と、物的アクターすなわち物的要素との協働の一体としてとらえられることが必要と主張するものである（詳しくはΩ3参照）。

シン編著におけるポストツーリスト概念をめぐる諸論調は以上とし、次に同編著におけるテーマ③「ツーリストが旅行する目的は何か。それは『自己の発見か』あるいは『他者の探究か』」について考察する。まず、基調論文であるモスカード（Gianna Moscardo）の所論を取り上げる。その論考ではツーリズム動機は、究極的には、マズロー（Maslow,A.H.）の欲求階層8段階説に立脚するものとされている。モスカードはオーストラリア・クィーンズランド、ジェームズ・クック大学所属である。

Ⅲ. ツーリズム動機をめぐって

このテーマについて編著シンは、編著冒頭における序文において、ツーリズム動機について「日常生活の細々した用務からの逃避」を挙げるものが結構あるが、しかしこれは「回答にはならない（most innocent）回答」といわざるを得ないと述べている（S3,p.6）。つまりこれは、少なくともここでいうツーリズム動機にはならない。ツーリズム動機には他にもっと適切なものがあるはずである、というのである。この点は、以下のこのテーマ諸論文を考察する際、承知しておくべきことである。またここではテーマ上、従って用語上、トラベルとツーリズムとの区別は必要な問題意識とはなっていない。最初のモスカード論文のタイトルは「自己と他者の探究の旅」（文献M6）である。

1. モスカードの「高度な人間欲求充足」論

モスカードはその論文冒頭において、マキャネル（MacCannell, D.: 文献M3）が次のように述べているところを紹介している。それは、マキャネルが現代西欧社会の特徴を次のところに、すなわち疎外された個人は、他者の発見を通じて自己の生活にとって意味（meaning）あるものを見出すところにあると論じていることである（cited in M6, p.72）。

しかしモスカードは、それを全面的に可とするのではなく、少なくともツーリズムでは、他者の発見ではなく、はっきりと自己の発見を目指すものとすべきであるとする。すなわちツーリズムの動機（reason）は、もとより多様であるが、モスカード自身としては「多くのツーリストは主として自己自身を発見するためにツーリズムを行う。ただしその場合、当人はそれを意識していないことが多い。また、こうした自己の発見は他者の存在を媒介

することが多いものである」と述べ、これがシン編著におけるモスカード論文の指導基線であると宣している (M6,p.72)。

このうえにたつてモスカードは、人間の行動動機に関するこれまでの論説を、主として、社会学と心理学の分野について究明し、ツーリズム動機として土台となるものは、現時点ではマズローの欲求階層説であるとし、それが旧来の5階層説から、1960年代・1970年代に8階層説に拡大されていることに大きく依拠し (ここでは文献M4も参照)、結局、「ツーリズムは自己の探究 (search for self) のために行われるものである。ただしそれは、社会的諸条件に照応したものであり、従ってその方法や仕方は多様なものである」という結論になるとしている (M6,p.80)。

この点を論証するため、ツーリズム論におけるこれまでの論説を検討すると、やはりまずマキャネル説が対象になる。しかしこれについては、以下のような問題点があるとする。すなわちその論述でまず目につくことは、そこではすべてのタイプのツーリズムが対象になっているのではないことである。対象になっているのは、いわゆる中間層の物見遊山的ツーリズム (middle-class sightseers travelling) だけで、例えば (UNWTOのビジターの定義にみられるような) ビジネス上や個人用務上のものなどは除外されている。

そこでモスカードは、ここではさしあたり、こうした限界付きではあるが、「ツーリストとは、社会的に受け容れられる一貫したアイデンティティを展開することによって自己の生活を意味あるものとしようとするものである」というテーゼが確立されるとする (M6,p.73)。

このうえにたつてモスカードは、社会学分野のものを考察する。ここでは例えば1990年のアーリの説 (文献U2)、1979年のコーヘン (Cohen,E.) の説 (文献C3)、1981年のG. ダン (Dann,G.) の説 (文献D1)、1982年のイソ・アホルス (Iso-Ahols,S.) の説 (文献I)、2010年のソロン (Sorlon,D.) の説 (文献S4) などが対象とされ、「これらの社会学的アプローチでは、ツーリズム動機は自己の発見が中心的動機になっていることを確認できる」と宣している (M6,p.75)。

次いで心理学的アプローチが取り上げられる。ここでは、例えばプログ (Plog,S.C.) の説 (文献P1) が対象になるとする。そのうえで、プログのいうところに関連しモスカードは「人々がその動機や決定のすべての局面を意識的に知っているという前提は、正しくない」と宣している (M6,p.76)。このうえにたつてモスカードは、マズローの欲求階層説がツーリズム動機を説明する根本的枠組みとして有用であるとするが、ツーリズム理論における適用のされ方としては、次の2点を指摘しておく必要があるとしている。

第1に、マズローの欲求階層説は、周知のように、最初1954年に5階層説として提示されたが、その後、8階層説に拡張されている。このことが当然ツーリズム動機においても反映されなくてはならないが、この点が多くの場合はまだ充分

なものとはなっていない、というのである。

ちなみに、1954年に発表されたそれは、周知のように、人間欲求 (needs) には序列的に5階層があるとするものであった。しかしそれが8階層から成るものとされており、それらは低階層からいって次のものとされている。

- ⑧ 生物的・生理的欲求 (biological & physiological)、
- ⑦ 安全 (safety) の欲求、
- ⑥ 愛と所属 (love & belongingness) の欲求、
- ⑤ 尊厳 (esteem) の欲求、
- ④ 認知的 (cognitive) 欲求、
- ③ 美的なもの (aesthetic) の欲求、
- ② 自己実現 (self-actualization) の欲求、
- ① 超越的 (transcendence) 欲求。(超越的欲求とは、一言でいえば、他人が自己実現をすることを援助するようなことをいう (M4,p.3))。

第2に、モスカードによると、「これまでのマズローの欲求階層説をツーリズム理論に適用する場合、多くの問題点があった」といわれるものである。例えば旧来の5階層説の場合、とにかくその全部がツーリズム動機に適用される (あるいは、されねばならない) ものとされ、休日にツーリズムに行くことが人間の (5階層中の) 生理的欲求に基づくというような説明もあった。モスカードは、こうしたものは、人間のツーリズム欲求の本質的特徴を理解していないもので、マズローの欲求階層説をいわば機械的に適用しただけのものであるとし、こうしたものは到底受け容れ難いと評している (M6,p.77)。

そこでモスカードは、マズロー説のこれまでの発展・拡大の経緯をかなり詳しく紹介し、それを実質的な結語としているが、ここにはモスカードのマズロー説に対する評価の高さが十分に示されている (M6,pp.76-79)。つまりモスカードは、ツーリズム動機ではこうした幅広い欲求動機を考え、人間欲求には少なくともマズロー説によっても、今日では以上のように8階層までであることが充分考慮されなくてはならない、というのである。

モスカードはそのうえで最後に、社会にはツーリズムを好まない人もあることが認められなくてはならない旨を付け加えている。それは、例えばツーリズムについて嫌な思い出をしたことがある場合などで、モスカードは、こうした人も存在することを指摘し、最後に「現在の西欧社会では、旅行に出かけることを推進する強い社会的プレッシャーがあることは間違いないが、しかし、ツーリズムが人間の根本的欲求を充たすうえで最も効果的なものであるということは、言えない」と結んでいる (M6,p.80)。

モスカード論文については以上とし、次にダン (Graham Dann) の所論を取り上げる。ダンはいギリス・ベッドフォードシャー大学所属で、その論文タイトルは「トラベル動機となるものは、自己か、他人か: 単純に選択できるものか、選択はスボイルされたものか」 (文献D2) である。同論文では要するに、ツーリズム動機における自己性と他者性との調和的両立が目標点になっている。ただしここでは、テーマのうえからも、トラベルとツー

リズムとの区別は、直接的な問題意識とはなっていない。

2. ダンの「第三者も入れたトラベル動機」論

ダンは、このテーマ②の基調論文であるモスカード論文に対する批判、というよりは旧来からのツーリズム理論に対する反省から出発している。ダンは、例えばモスカード論文で言及されているイソ・アホルスの所論などは、個々のツーリスト・レベルにおける動機の解明には大いに有用であるが、しかしマクロ的社会的レベルにおける解明は充分になされてはいないものとする。

つまり、これまでのツーリズム論は、ツーリズム動機の究明でも、あくまでも個人としてのツーリスト中心という枠内にとどまるもので、視野が狭いものであったために、ツーリズムの影響といった問題でも的外れといわざるを得ないものに終わっていた。例えばブルンナー（Bruner, E.: 文献 B）のように、人間はツーリズム経験の後、人が変わったようになるが、しかしこれは、ツーリズム地でツーリスト受け入れ作業をしている人には妥当しないという論者がある。というのは、ツーリスト受け入れ地では、ツーリストが去った後でも事態は変わるところがないからである。例えばアフリカなどの超歴史的状態や歴史的進歩から取り残されている地区では、ツーリストが去った後でも事態は変わることがないからである、と論じられてきた。

しかしダンは、これは全く表面的な見方で、実際には「これと反対のことが起きているのではないか」という。すなわち、発展途上国対象のツーリズムのような場合、（発展先進国の住民である）ツーリストたちは、実際には当該ツーリズムを経験しても、それにより自己自身が変わることはほとんどないが、反対に、そうしたツーリズムの受容地の住民では、ツーリズムとの関係のいかににより大きな影響をうけているはずであると考えるべきであると論じている（D2, p.82）。

そこでダンは、ツーリズム動機の考量にあたっては、こうした事情も勘案して、少なくとも関連する第三者も加えたスキームが必要と提議し、それを「第三者を加えることという原則（the principle of addo tertium）」とよんでいる（D2, p.83）。これは、一言でいえば、例えばツーリズム動機を考えるような場合でも、関連する第三者、つまり関連他者に対し与える影響も考える必要があることを主張するものである。ただしここでいう他者、すなわち第三者には、大別すると次の2者があるというものである。第1は、受け入れ地のツーリズム業務当事者はじめ（交通関係機関など）ツーリズム実施上のすべての当事者（以下では“ホスト要員”という）である。第2は、同行のツーリスト仲間（以下では“ツーリスト同僚”という）である。つまりダンの主張は、ツーリズムとは、ツーリスト本人と上記2者、計3者のものの関わり合いのなかで行われると考えるべきことをいうものである。

この場合、これら3者の関わり合いには、ダンによれば、次の8種のものがある（表1）。つまり、ツーリズムはこうした関連において、その影響、従ってツーリズム動機も考える必要があ

るというのである。

表1：ツーリスト自身と他の2種のツーリズム関係者との関わり合い

番号	関わり合い（ツーリズム動機・意欲）の種別
1	当該ツーリストの動機にのみ関わり合い、他のツーリスト同僚やホスト要員の意欲等には直接関わり合いがないもの。
2	当該ツーリストの動機とツーリスト同僚の意欲にのみ関わり合い、ホスト要員の意欲等には直接関わり合いがないもの。
3	当該ツーリストの動機とホスト要員の意欲にのみ関わり合い、ツーリスト同僚の意欲には直接関わり合いがないもの。
4	当該ツーリストの動機、他のツーリスト同僚およびホスト要員の意欲のいずれにも直接関わり合いがあるもの。
5	当該ツーリストの動機およびホスト要員には関わり合いがあるが、他のツーリスト同僚の意欲等には直接関わり合いがないもの。
6	ホスト要員の意欲には関わり合いがあるが、当該ツーリストの動機と他のツーリスト同僚の意欲には直接関わり合いがないもの。
7	他のツーリスト同僚とホスト要員の意欲には直接関わり合いがあるが、当該ツーリストの動機には直接関わり合いがないもの。
8	当該ツーリストの動機にも他のツーリスト同僚にもホスト要員の意欲にも直接関わり合いがないもの。

出所：D2, p.84

このうえにたつてダン、ヴェブレン（Veblen, T.: 文献 V）の“見せびらかしの消費（conspicuous consumption）”にも言及し、これなどは社会的なツーリズム動機の研究にとって重要な視点を与えるものであるが、モスカード論文では触れられていない、ことなどを指摘している。

ダンの所論は以上とし、次にマッカーヒヤー（Bob McKercher）の論文を取り上げる。マッカーヒヤーはカナダのツーリズム関係専門家で、シン編著収録論文のタイトルは「ツーリストは自己のためのもの」というものである（文献 M5）。ツーリズム動機はあくまでも自己主義的なものに尽きることを主張するものである。

3. マッカーヒヤーの「ツーリズムは自己主義的なもの」という主張

マッカーヒヤーは、その論文冒頭において、学者は人間事象を必要以上に複雑にするものであると述べ、そのうえでツーリズムは要するに、「人間行動のうちで最も自分勝手なもの（self-indulgent）、少なくともその1つであって、ツーリズムは根本的に自己主義的な（selfish）ものである。…端的に言えば『私はツーリストだから、私の好きなようにする』がモットーである」という（M5, p.87）。

マッカーヒヤー論文は、このことを一貫して主張するものであ

るが、ただしマッカーヒヤーによれば、「こうしたツーリズムにおける自己主義性は、肯定的積極的意味がないというものではない。というのは、それは例えば、パワフルな行為やそのきっかけになることがありうるものであるからである。そうでなければ人間は、ツーリズムに行くことなどはないであろう」と論じている (M5,p.87)。これが、この問題におけるマッカーヒヤーの根本的主張点たるものである。

ツーリズムがこうした形で、すなわち自己主義的な考えにたつことによって、人間性の向上に役立つものであることは、マッカーヒヤーによると、制度的には例えば、次の2点に立脚する。ひとつは、それが自由を広め促進することである。例えばこれまで一般に公開されてこなかった所において、ツーリストに限り公開することが始まり、全面的公開となることはよくあることである。今ひとつは、アダム・スミスが指摘しているところの、“私益即公益”のテーゼが働くことである。

人間行為が本来自己主義的なものであることについて、マッカーヒヤーが紹介している例をみると、例えばカルアナ (Caruana,R.) / クレイン (Craine,A.) (文献C1) では、他者志向的理論でも自己主義志向性が全くないのではない。それが隠蔽されているだけであると論じられている。またコホラン (Coghlan,A.) / フェネル (Fennell,D) (文献C2) では、いわゆる利他主義 (altruism) には、その行為に見返りを求めるものが多く、その本性は極めて利己主義的 (egoistical) というべきものと提議されている (cited in M5,p.89)。

さらにツーリズム論者についてみると、マッケイブは2005年の論考 (M1) で、ツーリストには自らを他のツーリストとは区別されたいものとする本性的な傾向があることを指摘している。またこのことは、レイパー (Leiper,N.: 文献L1) では、ツーリズム理論でも、ある旅行者をツーリストとよぶか、トラベラーとよぶかについて論議があるとされているところにはっきり現われているとされている。

この場合、ツーリストとよぶものは、その旅行者が他の旅行者となんらかの共同心をもつ者と考えられているが、トラベラーという場合には、こうした共同心がなく、自己の力や事情だけで旅行する者という考えにたつものとされている。ところがドイツのツーリズム論者、プレベンセン (Prebensen,N.) らの2011年の書における調査結果によると、旅行者の多くは、このような意味における“典型的なツーリストではない”と答えている (P2, cited in M5,p.90)。

Ⅳ. あとがき—現代ツーリスト論のあり方によせて

以上で論述した現代ツーリストのとらえ方について、総括的に第1に注目されることは、少なくとも英語圏では、旅行者を示す用語において、今日でもトラベラー (トラベルを含む) とツーリスト (ツーリズムを含む) とを区別して使用するという慣例的な考え方が強くみられることである。

ちなみに、ツーリストという言葉が最初用いられたのは、

1838年、スタンダールによってであるといわれるが⁵ (G,p.11)、当時盛んになりつつあった、旅行者によるパッケージツアーの参加者を、それまでの個人的なトラベラーと区別するためであったとみられる。これに対し世界観光機関 (UNWTO) における旅行者の定義において主語がビジターとなっていることについては、すでに一言したところであるが、時代的には第一次世界大戦後の国際連盟時代の事情が根底にあったと考えられる。ここでは、本稿筆者としては、ツーリズムについては統計上の「定義」と通常用語上の「概念」との区別が必要であり、有用ということのみを再度指摘することとする。

本稿で取り上げたシン編著における所論では、次に、現在のツーリストについて、これを「ポストツーリスト (ポストツーリズムを含む)」とよぶことが、当然のいわば前提とされているが、まず、現在の社会を「ポストモダン」とよぶのは、果たして妥当であろうか、という問題がある。特に最近 (例えば2000年代以降) では、少なくともそれまでのポストモダンとは時代の様相が変わっているのではないか。

この点は、本稿で取り上げた論考のなかでも、ウーリーイの所説に端的に表明されている。ウーリーイはポストモダン・ツーリズム論の代表的論者とみられるが、そのウーリーイが、今や時代のスローガンは、ポストモダン時代のスローガンである「差異の消滅」から、「再差異化」に移行していると提議している。これは、極めて重要な主張点である。

これまでの考え方でいえば、「差異の消滅」テーゼの適用中止は、すなわち「ポストモダン」概念の適用中止と言わなくてはならないからである。

そうとするならば、世界的論調の流れからいえば、今や「トランスモダン」時代の到来というべきものとなる。そしてこのことが、今や現実の問題として論じられるべきことを強く感じる。トランスモダンという概念は、もともと1980年代終わりに、スペインのマグダ (Magda,R.M.R.) により提起されたものであるが (Ω2)、近年では2011年、オックスフォード大学のティブス (Tibbs,H.) により取り上げられ、1980年代頃にモダンの時期から移行したものとして提議されている (T, pp.13,18,27)。

この場合マグダでは、トランスモダンは“モダン→ポストモダン→トランスモダン”という歴史発展のトリアードに立脚するものとされているのに対し、ティブスでは、ポストモダンという時期はなく、モダンから直ちにトランスモダンに移行するものとされている。そしてトランスモダンという言葉は、「モダンを通り過ぎたという意味 (through (trans-) modern)」に基づくとされ、さらにそれは「サステナビリティの時代 (the era of sustainability)」とも規定されるものとされている。

それ以前にツーリズム論でも、トランスモダンについて、気鋭の論客、アテルイエヴィック (Ateljevic,I.) らにより早くから取り上げられているし (文献A)、近年世界的に注目されている“ウェルネス・ツーリズム (wellness tourism)”でも、トランスモダン時代の先駆けと位置づける試みがある (Ω2,4)。世界の動向は、ツー

リズム論でも、今やトランスモダンに閑説することなしには論じられない。

ところでトランスモダンへの移行とともに、「ポストツーリスト」という言葉は、変更が必要という見解があるかもしれないが、本稿筆者としてはその必要はないと考える。というのは、例えば本稿で既述のデュンもいうように、もともと「ポストツーリスト」と「ポストモダン時代のツーリスト」とは別概念であるし、タイプのようポストモダンというものはないとする見解もあるから、「ポストツーリスト」という言葉は、ポストモダンとは関係なしに、「『脱ツーリスト』としてのツーリスト」あるいは「『ツーリスト以降』のツーリスト」という意味のものとして改めて概念規定され、トランスモダン時代のツーリストとしても有効と考えられるからである。

この場合トランスモダンは、本稿筆者の見解では、あくまでもポストモダンが止揚したものであって、ポストモダンが一層進展し、質的に別の規定のものになったものであるが、この点に関連して、今日のツーリズム、つまりはツーリストのあり方について、編者シンが、同編著テーマ③の編者後書き (concluding remarks) で次のように論じていることが、極めて注目される。

すなわちシンは、「今やこの地球世界では、世界全体が生存できるかどうかが現実の問題となり始めているということからいっても、ツーリズムについて、われわれすべてが自己主義的思考 (self) をとるならば、ツーリズムは社会的に受け入れ難い行為となるであろう。もしもツーリズム研究者たちがツーリズム(トラベルを含む)は何故行われるかという問題について、これまで以上に批判的にかつ注意深く (more critically and carefully) 立ち向かうことをしないならば、ツーリズムは悪しき慣習のものとされ、どのようになってもいいもの (irrelevant) となる危険がある」といっている (S2,p.93)。

この点は、本稿筆者としては全面的に賛同するものである。このためには、さしあたり国連で強く先導している“サステイナブル・ツーリズム”の実践的展開がますます強く推進される必要がある。ところがこれに対し、ツーリズム論の一部には、旧来的な価値判断排除の方法論的立場にたって、サステイナブル・ディベロップメントはツーリズムにはなじまないものであるから、サステイナブル・ツーリズムは実際には不可能であり、神話というべきものという見解がある。

本稿筆者としては、サステイナブル・ツーリズム論の始原になった国連・ブルントラント委員会報告書にはかなり多様な解釈があることなどもあって、サステイナブル・ツーリズム論にもかなり様々のものがあり、純論理的には「サステイナブル・ツーリズム=神話論」もありうると思われるが、しかしそれには、少なくとも今日のツーリズムでは、時代的正当性がないと考える。この主張は、価値判断否定の実在論的立場にたつものであるが、しかし今日では、上記のシンの言葉からいっても、価値判断を認める規範論的なアプローチが必須であって、これを否定する実在論的立場は時代錯誤的なものである。故にそうした主

張には、少なくとも今日のツーリズム理論としては、時代的正当性がないと考える (この点についてはΩ1、第2章参照)。周知のように、社会現象における価値判断の可否は、時代のいかんにより論者の立場のいかんにより変わるものである。

【参考文献】

- A: Ateljevic, I. (2013), Visions of transmodernity: A new renaissance of our human history? *Integral Review*, vol.9, pp.200-219.
- B: Bruner, E. (1991), Transformation of self in tourism, *Annals of Tourism Research*, vol.18, pp.238-250.
- C1: Caruana, R. and Craine, A. (2011), Getting away from it all: Exploring freedom in tourism, *Annals of Tourism Research*, vol.38, pp.1495-1515.
- C2: Coghlan, A. and Fennell, D. (2009), Myth or substance: An examination of altruism as the basis of volunteer tourism, *Annals of Leisure Research*, vol.12, pp.377-402.
- C3: Cohen, E. (1979), A phenomenology of tourist experiences, *Sociology*, vol.13, pp.170-201.
- D1: Dann, G. (1981), Tourist motivation, An appraisal, *Annals of Tourism Research*, vol.8, pp.187-219.
- D2: Dann, G. (2015), The quest for the self or the other as motivation for travel: Simple choice or spoiled for choice, in: Singh, T.V. (ed.), *Challenges in tourism research*, Bristol: Channel View Publications, pp.81-86.
- D3: Dunn, D. (2015), Those people were a kind of solution: post-tourists and grand narratives, in: Singh, T.V. (ed.), *Challenges in tourism research*, Bristol: Channel View Publications, pp.26-33.
- G: Ghanem, J. (2017), Conceptualizing the tourist: A critical review of UNWTO definition, retrieved April 10, 2018, from: <http://dugi.doc.udg.edu/biostream/GhanemJoeytreball.pdf>
- I: Iso-Ahol, S. (1982), Toward a social psychological theory of tourism: Motivation: A rejoinder, *Annals of Tourism Research*, vol.9, pp.255-262.
- L1: Leiper, N. (2004), *Tourism Management*, 3rd ed., Frenchs Forest: Pearson Education.
- L2: Lohmann, G. and Netto, A.P. (2017), *Tourism theory: Concept, models and systems*, Wallingford: CABI.
- L3: Lyotard, J. (1979), *La condition postmoderne: Rapport sur le savoir*, Paris: Éditions de Minuit (小林康夫訳『ポストモダンの条件』星雲社)
- M1: McCabe, S. (2005), Who is tourist? A critical review, *Tourism Studies*, vol.5, pp.85-106.
- M2: McCabe, S. (2015), Are we all post-tourists? tourist categories, identities and post-modernity, in: Singh, T.V. (ed.), *Challenges in tourism research*, Bristol: Channel View Publications, pp.18-26.
- M3: MacCannell, D. (1999), *The tourist: A new theory of leisure class*, Berkeley: University of California Press (安村克己/須藤廣/高橋雄一郎/堀野正人/遠藤英樹/寺岡伸吾訳『ザ・ツーリスト—高度近代社会の構造分析』学文社)
- M4: McLead, S. (2017), Maslow's hierarchy of needs, retrieved April 10, 2018, from: www.simplypsychology.org/maslow.html
- M5: McKercher, B. (2015), Tourism: The quest for the selfish, in: Singh, T.V. (ed.), *Challenges in tourism research*, Bristol: Channel View Publications, pp.87-91.
- M6: Moscard, G. (2015), A journey in search of self and the other, in: Singh, T.V. (ed.), *Challenges in tourism research*, Bristol: Channel View Publications, pp.72-81.

- P1: Plog,S.C. (1974), Why destination rise and fall in popularity, *Cornell Hotel and Restaurant Administration Quarterly*, vol.14, pp.55-58.
- P2: Prevensen,N., Larsen,S. and Abelsen,V. (2011), I'm not a typical tourist: German tourists' self-perception, actives, and motivations, *Journal of Travel Research*, vol.41, pp.416-420.
- S1: Sharpley,R. (2009/2010), The myth of sustainable tourism, *Center for Sustainable Development Working Paper Series 2009/2010*, no.4.
- S2: Singh,T.V. (2015) (ed.), *Challenges in tourism research*, Bristol: Channel View Publications.
- S3: Singh,T.V. (2015), introduction, in: Singh,T.V. (ed.), *Challenges in tourism research*, Bristol: Channel View Publications, pp.1-15.
- S4: Soron,D. (2010), Sustainability, self-identity and the sociology of consumption, *Sustainable Development*, vol.18, pp.172-181.
- T: Tibbs,H. (2011), Changing cultural values and the transition to sustainability, *Journal of Futures Studies*, vol.15, pp.13-32.
- U1: Uriely,N. (2015), Exploring the post-tourist: Guidelines for future research, in: Singh,T.V. (ed.), *Challenges in tourism research*, Bristol: Channel View Publications, pp.33-38.
- U2: Urry, J. (1990), *The tourist gaze*, 1st ed., London:Routledge (加太邦弘訳『観光のまなざし』法政大学出版局)
- U3: Urry,J. (2007), *Mobilities*, Cambridge: Polity Press.
- V: Veblen,T. (1899), *The theory of the leisure class*, New York : Macmillan (小原敬士訳『有閑階級の理論』岩波文庫)
- Ω1: 大橋昭一 (2014) 「第1章観光とは何か」、「第2章観光学はどのようなものか」大橋昭一／橋本和也／遠藤英樹／神田孝治編『観光学ガイドブック』ナカニシヤ出版
- Ω2: 大橋昭一 (2014) 「トランスモダニティ論の勃興—現代社会をどうとらえるか: その基本的な類型」『和歌山大学・経済理論』376号 103-128 頁
- Ω3: 大橋昭一 (2015) 「アクターネットワーク理論の進展過程—物質主義志向的アクターネットワーク理論を中心に」『和歌山大学・経済理論』379号 41-62 頁
- Ω4: 大橋昭一 (2018) 「ウェルネス・ツーリズムの進展—現代ツーリズムの新しい1つの動向」『和歌山大学・観光学』18号 107-117 頁

受理日 2018 年 11 月 28 日